

共にまかせて苦闘する二十六日間の漂流が始まるのであった。私は「名取」と共に海の藻屑となることなく九死に一生を得、何とか生きて帰ってこれたのは太平洋戦争の奇跡の一つといっても過言ではないであらう。

海上特攻艦隊戦艦「大和」と共に

岐阜県 牧野 義 美

私は岐阜県恵那郡付知町で、父末吉の三男として、大正十二年九月五日に誕生しました。地元の尋常高等小学校を卒業後、昭和十八年四月、海軍を志願して、広島の大竹海兵団に入団しました。以来、日本海軍独自の「月月火水木金金」の猛訓練によく耐え、逞しい海軍の精鋭たるべく成長したのです。

しかし、私が一生忘れることの出来ないことは、祖国の盾といわれた沖繩決戦、海上特攻艦隊の旗艦「大和」に乗り、出撃して九死に一生を得たことでありま

す。ありし日の日本帝国海軍の栄光の中で燃焼し尽くした青春があったことであります。

海兵団で三ヵ月間の新兵教育を受け、十二・七センチ砲員（副砲）として戦艦「伊勢」に乗り組み、十八年七月、南洋群島のトラック島に出動。十二月、呉軍港に帰港し「伊勢」を退艦して呉海兵団に仮入団しました。

十九年二月、戦艦「大和」に乗り組み、二十五ミリ機銃員として配置に就いたのです。戦艦「大和」はご承知のとおり、世界に群を抜く超弩級戦艦であり、長く日本民族の誇りとするに足る戦艦でした。そして私はサイパン沖作戦や、捷一号作戦といわれる比島沖海戦にも出動しました。

しかし、残念ながら比島海戦は完敗に終わり、その後の日米決戦に最後の断を下したものであるといわれています。その後が、菊水一号作戦といわれる沖繩への「海上特攻隊」としての出撃であります。

二十年四月一日、米軍の四個師団が沖繩本島の嘉手納海岸（中飛行場北西）等の上陸し、その日のうちに

北及び中の両飛行場は敵に占領されました。

このため、沖繩の陸軍第三十二軍の牛島軍司令官は、四月七日を期しての総攻撃を計画したので、これに呼応し連合艦隊も総攻撃を実施するため戦艦「大和」以下十隻（第二水雷戦隊一軽巡洋艦「矢矧」、駆逐艦「冬月・涼月・朝霜・初霜・霞・磯風・雪風・浜風」をもって菊水作戦の海上特攻艦隊を編成したのです。

当時、「大和」は捷号作戦で生き残り、瀬戸内海の西部に停泊していましたが、燃料が極端に欠乏し、行動の自由も、訓練の自由も束縛されていました。しかも飛行機の援護がない水上艦艇は、現実として無力に等しくなっていました。

「大和」は世界第一の大戦艦、空前絶後の巨砲、それに乗り組んでいる将兵の敢闘精神だけが「大和」に残された誇りでありました。

四月六日、伊藤整一海軍中将の指揮する海上特攻隊は瀬戸内海の徳山沖を出港し、沖繩に向かった。それは、十五時二十分だといわれています。十八時、豊後水道の西水道に入ったところ、「大和」の前甲板には、

最後の総員集合がかけられ、能村艦長から総員に連合艦隊司令長官の訓示が次のように伝達された。

「帝国海軍部隊ハ陸軍ト協力、空海陸ノ全力ヲ拮据テ沖繩周辺ノ敵艦船ニ対スル総攻撃ヲ決行セントス。皇国ノ興廢ハ正ニ此ノ一挙ニアリ茲ニ特ニ海上特攻隊ヲ編成シ壯烈無比ノ突入作戰ヲ命ジタルハ、帝国海軍力ヲ此ノ一戦ニ結集シ光輝アル帝国海軍海上部隊ノ伝統ヲ発揚スルト共ニ其ノ榮光ヲ後世ニ伝ヘントスルニ外ナラズ、各隊其ノ特攻隊タルト否トヲ問ハズ愈々殊死奮戦敵艦隊ヲ随処ニ殲滅シ以テ皇国無窮ノ礎ヲ確立スベシ」

「大和」部隊はこの長官訓示のとおり、「帝国海軍ノ伝統ト榮光」のため、大軍艦旗をかかげて、あえて死地に突入していったのです。しかし、十八時三十分には、すでに敵潜水艦に発見された形跡があったと言われています。

それも知らずに、私たちの乗った「大和」艦隊は何ごともなく、夜のうちに九州の南端佐多岬を過ぎ、七日の朝は西南端の坊ノ岬をまわった頃でした。六時三

十分から十時までは、味方の戦闘機は五機ないし十機いたが、十時、味方の戦闘機が去ると、友軍機と入れかわったように敵機が飛んできた。

すると、突然、朝方から機関故障で落後し始めていた駆逐艦「朝霧」が、「ワレ敵機ト交戦中、敵機三十機を探知ス」と報じて、消息を絶ってしまいました。

この午前十時頃より三回に分けて米軍の雷撃機と艦載機が、一回に百数十機、「大和」部隊に襲いかかりました。私は、後部主砲の左舷三連及の露天機銃の射手として、これに交戦していました。

「大和」は残念ながら、敵の魚雷攻撃を片舷に十二発受け、後部にも三発受け、艦が傾きかけたので、これを水平に保つたため、反対側に給水して水平を保つようにしたのです。

そのうち、格納庫に魚雷を受け、そのため艦は次第に傾いて、遂に横倒しになってしまいました。この時、駆逐艦が横付けとなり、司令部員たちは、その駆逐艦に乗り移った。そのため、ほとんどの司令部員は助かったということです。

私はこの時、海中に飛び込んだので、艦が沈む時の渦に巻き込まれ、艦といっしょに海中に吸い込まれて、気を失ってしまったのです。

それから、どのくらいの時間、気を失っていたかわからないが、気が付くと、薄暗い水中であり、またしても気を失った。だが、いつ浮上したのか覚えていなかったが、「大和」が沈没したのが午後二時頃で、私が駆逐艦に救助されたのが、たしか夕方でした。

海上特攻隊は「大和」以下六隻が沈没したため沖繩突入は中止となりました。

日本海軍海戦総覧を読みますと、「大和」部隊の最後は大要次のように記されています。

戦艦「大和」は最大の速力で回避運動をしながら対空射撃で応戦していたが、後部マスト周辺に爆弾一発、左舷前部に魚雷一本の命中弾を浴びた。輪形陣の左翼、駆逐艦「浜風」が爆撃されて航行不能となり、さらに魚雷命中で炎上沈没した。

その後、軽巡「矢矧」が爆弾、魚雷の命中弾を浴びて航行不能になった。「冬月」「涼月」も被弾する。

雷撃は「大和」を狙い続ける。攻撃は左舷に集中し、魚雷三本が命中。船体が左方に傾斜した。艦の水平を維持するため右舷に注排水区画に三千トンの海水が注入された。そして午後二時頃、米機は姿を消した。だが、米軍の攻撃は終わらなかった。十数分後、再び百機を超える艦載機が襲ってきた。「大和」は傷ついた巨体にさらに左右両舷から三本の魚雷を受け、その上、急降下爆撃による爆弾も三発命中、さしもの「大和」も大きく左舷に傾き始めた。

もはや沖繩への到着は不可能になっていた。長官から「深く撤退し事後の作戦に万全を期せ、幕僚は「冬月」に移乗し、残存艦を指揮し、生存者を救出して帰投せよ。……」

スピーカーは「総員最上甲板に集合」を命令していた。艦内の惨状は想像するに余りある。直後、「大和」は堪えきれぬように転覆した。……目的地、沖繩までの約半分の行程であった。艦上及び艦内での戦死者は、乗組員二千七百六十七人中、二千四百九十八人といわれる。

とあります。

海上特攻隊は「大和」を含む六隻が沈没し、沖繩突入は中断され、陸軍部隊の総攻撃も中止されました。その後、私は内地に着いて、陸戦隊第二十三大隊第二中隊第四分隊の下士官として呉周辺で訓練等に従事していました。

私は八月六日午前八時十五分、広島に投下された原爆の救急業務に従事するため同日午後、呉より広島に向い海田市まで列車で、あとは歩いて広島に入り、死体処理等に従事しました。その後は鉄道復旧作業に当たり、四日後に初列車を動かし呉に帰った。

八月十五日終戦となり、その日より一週間余、部下十人余を引率して長島波止場の整備に従事しました。さらに本庄水源地の整備に当たり、十月に復員して、付知の家へ帰ることが出来ました。私は、戦艦「大和」、二百六十余人生存者の一人として、今日まで生き続けることが出来たことを幸せと思い、また、沖繩特攻ならず戦没した「大和」隊戦友の冥福を祈ること切なるものがあります。